

19 華岡青洲の系譜に関する新知見

— 海南省の柳川家と川端家 —

松 木 明 知

江戸時代以前の医師として、一般の人々にも広く知られている人物としては、まず第一に紀州の華岡青洲の名が挙げられるであろう。それ程彼の医学上の業績や学統はもちろんのこと、系譜についても、大正末年の呉秀三による研究以来、詳細に考究されてきた。にも拘わらず、例えば人物の研究において最も基本的な極く近親者の系譜、つまり青洲の同胞や子女の中で、未だ名前や生歿年が不詳とされる人物もいるのである。

演者は十数年来この問題の解決に鋭意努力してきた。漸く昨年青洲在世当時の華岡家の菩提寺である地藏寺の過去帳を見い出した。これまで華岡家の直系の子孫の方々にも知られていなかった過去帳である。この二冊の過去帳には青洲を含めて華岡家一門の百数十名の俗名、

法名、歿年月日、年齢などが記されており、これによって従来不詳とされてきた系譜中の不詳な人物の大半が明らかにされた。これについての詳細は「日本医史学雑誌」に近く掲載される予定である。

呉秀三の研究によると、青洲の同胞八人の中、二代隨賢の第四女（名は不詳）は「黒江町柳川氏に嫁す」とある。俗名はもちろんのこと、生歿年すら不詳である。この「黒江」は現在の和歌山県海南市の黒江である。同市の教育委員会の田岡氏の御協力を得て柳川家について調査したところ、柳川家は現在まで続いている旧家であることが判明した。天保年間に建築された柳川家の家屋は昭和四三年（一九六八）に文化庁から重要文化財に指定されており、また先祖代々の記録も克明に残されている。その系図を検討しても、右の述べた青洲の妹と推定される人物を見い出すことは出来ない。しかし柳川家第六代平兵衛の信太郎（一八三三～一八九五）の嫁は同じ黒江の川端六左衛門稠宣方から来たという。呉の著書には「川端六右衛門稠宣」とあるが「六左衛門」が正しい。青洲の三女は呉の著書によれば「黒江川端氏二嫁す」とあり、

ここに同じ黒江の柳川家と川端家の間に関係のあることが知られる。那賀町の地藏寺の過去帳によって、この三女の名は「於栄」であり、その法名は「常昭院釈尼妙浄」(天保五年五月二十七日歿)であることが判明したが、これは海南市川端家の法名帳、法事帳の記述と一致する。但し「常昭院」が正しい於栄は二九歳(数え年)で歿し、少なくとも四人の子どもがおり、その四番目の子供で二女の「もと」が、右の述べた柳川家の第六代平兵衛の信太郎に嫁していることが判明した。

このことから、呉の調査による青洲の妹が黒江の柳川家に嫁しているという記述は誤りで、多分華岡家に誤って伝えられていたためであろう。

右の事情を考慮すると、地藏寺の過去帳の青洲(三代随賢)の近親者と推察される俗名「キサ」法名「離境妙覚信女」が、これまで詳細不明であった青洲の妹であるとする演者の推定の可能性はより高くなつたと考えられる。

さらに柳川家の記録によれば「楠乃」と言う女が華岡随賢方から同家七代平兵衛の許に嫁に来た旨記されているが、これまで知られている華岡家の系譜中の「楠乃」

なる人物はいない。今後の研究課題である。

いづれにせよ。海南市の柳川家、川端家の調査によって、青洲の同胞の一人、子女の一人についてより正確な情報が得られたことは間違いない。

(弘前大学医学部麻酔科学教室)